

《論文》

バンクーバー冬季オリンピックに向けた カナダチームのメダル獲得計画

— 「Own the podium 2010 Final Report」より—

荒井 宏和

Medal acquisition plan of the Canadian Team for the Vancouver 2010 XXI Olympic Winter Games

～From Own the podium 2010 Final Report～

Hirokazu ARAI

キーワード：バンクーバー・冬季オリンピック，国際競技力向上，情報戦略

Keywords: Vancouver Olympic Games, Improvement of International Competitiveness, Intelligence

Abstract

“Own The Podium” is a detailed strategic plan to enhance the performance of Team Canada at the Vancouver 2010 Olympic Winter Games. The plan focuses on the organizational structure, numerical targets, increased funding, high performance services and the home advantage as key factors for Canadian success at the Vancouver Olympic Games. It is thought that knowing all the important information of the Canadian approach to improve its international competitiveness is beneficial for Japan. Details are shown as follows. 1. Organizational structure; Two or more organizations that were responsible for distributing the funds were united, resulting in a more strategic and efficient operation and investment. 2. Numerical target; Increase the number of potential medalists from 160 to 211. Increase the success rate from 27% to 50%. 3. Raised funding; Raise and secure funding for National Sports Federation in their build up to the Olympic Games, as well as for research related to performance enhancement of the Canadian Team. 4. The high performance service; “Top Secret 2010” is part of the OTP strategic plan and it will fund research projects in the field of equipment development, new training approaches, supplements and nutrition etc. with the aim to enhance the performance of Canadian athletes. 5. Home advantage; Hosting Olympic Games always raises the performance of the host country, therefore OTP plans to maximize the effect of “Home Advantage” for the Canadian Team.

1. はじめに

オリンピックに代表される国際大会では、各国がメダル獲得に向けて国家戦略として取り組み、それに対して長期計画に基づき競技者の強化育成に膨大な時間が費やされる。また持続的にその計画が遂行されるためには運用資金の確保と有効的な活用が求められる。

このような計画に基づいた取り組みは、イギリス、オーストラリア、ドイツ、フランスなど主要となる諸外国では実際に取り組まれており、メダル獲得の可能性が高い競技種目をターゲットとした重点投下策が実施されている。

一方、我が国においては、2001年に日本オリンピック委員会から、長期国際競技力向上戦略として、スポーツ振興基本計画と連動させた「JOC GOLD PLAN」が策定された。また、この次のステップには、2016年に東京オリンピック・パラリンピックが開催される事を想定して、金メダル獲得数を世界第3位とすることを目指した「JOC GOLD PLAN STAGE II」が明示された¹⁾。この中には、国際競技力向上を重要政策課題として国策という考えに基づき、取り組むべきとしている。

このように、トップスポーツの世界では、国が積極的に関与してスポーツの競技力向上方策に取り組むという流れがあり、その背景にはメダルの獲得数がスポーツの分野において、その国の国力を示すという考え方もある。

このような中で、2010年に冬季オリンピック大会が自国で開催されるカナダでは、2006年に実施されたトリノオリンピック開催時点で既に4年後に向けた強化計画が立案されていた。これは、「Own the podium2010」(以下OTP)と称するメダル獲得を合理的に遂行していくこと

を目的とした計画である。

カナダは、この計画に基づき、有効な人材と強化費の活用を推進させることが目標達成のためのロードマップとして捉え、オリンピック開催国としてメダルを獲得するためにどのようなイメージで推進していくかについては、今後注目するに値する計画であり、その内容と成果の整合性について分析していくことは、我が国が国際スポーツ大会への関わり方という観点から戦略的に大変興味深いことである。

そこで本論は、バンクーバー冬季オリンピックにおいてカナダのメダル獲得に向けたOTP計画の内容を組織体制、数値目標、強化費、ハイ・パフォーマンスサービス、そしてホームアドバンテージの観点について整理し、この取り組みについてまとめることとする。

2. 国内組織の統一

2010年2月にバンクーバーで開催される冬季オリンピック大会では、世界第1位になることを目標とするため、国内の全てのスポーツ組織を統合させ、35個のメダル獲得目標を設定した。よって、OTPを推進させる組織には、Sport Canada, COC (Canadian Olympic Committee), CPC (The Canadian Paralympic Committee), VANOC (The Vancouver Organizing Committee for the 2010 Olympic & Paralympic Winter Games) が運営委員会として構成され、そこに既存のスポーツ政策とハイ・パフォーマンス・スポーツシステムを融合し、戦略的に有効活用しながら助言を行うアドバイザリー委員会(9名のメンバーから構成される)が設置された(図1)。これにより、基金を扱う複数組織を統一させ、効率的に強化費

の運用を推進することが可能となることを狙いとした。そして冬季ハイ・パフォーマンススポーツ委員会（WHPSC）は、基金パートナーと競技団体の代表で構成する委員会を設置し、この施策を実行する役割を担うことになった。

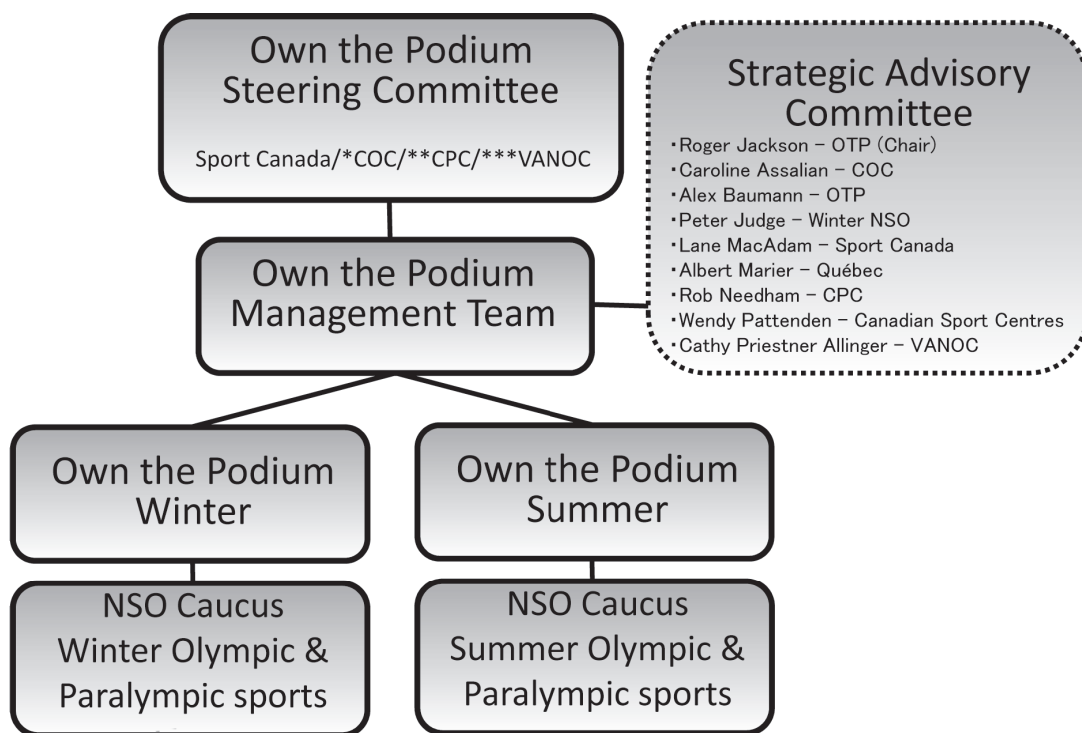
3. メダル獲得に向けた数値目標

2010年のバンクーバー・オリンピックに向けて、潜在的にメダル獲得の可能性のあるメダリストの数を増大し、オリンピックにおいてメダル獲得率を向上させることを目標に掲げた。この背景には、仮に従来の強化システムを継続し

た場合、2010年には少なくとも16個のメダル獲得に留まるとする予測がされたためであった。

カナダチームのメダル獲得率は、2002年のソルトレイク冬季オリンピックにおいて27%であり、これは参加した22カ国の獲得率が33%、このうちトップ5カ国は64%であったことに対して悲観的な結果であると評価した。

そこで、過去の成功率と潜在的にメダル獲得の可能性のある選手数は2001/2002のシーズンのW杯（またはそれに順ずる大会）でトップ5を少なくとも2回経験した競技者と定義づけ、目標メダル獲得数を35個とした。また、その試算方法は、以下のとおりである。



*COC:Canadian Olympic Committee / **CPC:the Canadian Paralympic Committee /
 ***VANOC:The Vancouver Organizing Committee for the 2010 Olympic & Paralympic Winter Games

図1 OTPの組織構成図

成功の確率 × 潜在的なメダリストの数
 =メダルの獲得数

この数値を目標として達成する条件には、2010年にメダル獲得の可能性がある選手を育成し、国内のスポーツ組織毎にこの計画が実施されることを前提とした。また、選手の育成モデルをその競技種目のメダリストのプロセスを基準とし、さらにメダルを獲得する可能性がある国のスポーツ政策をベンチマークすることが望ましいと判断した。

よって以上のことから勘案して、メダル獲得に向けた目標を次のように掲げることとした。

- 1) メダル獲得の可能性がある選手の増大
 (目標数値160人~211人)
- 2) メダル獲得率の増大
 (目標数値27%~50%)

これらの数値目標を達成させるために、メダルを獲得する可能性がある選手全体うち、40%の選手を対象とする。このうち2010年には、20%の選手やチームがメダル獲得を期待されると見込まれる。

加えて各競技団体は、2010年にメダル獲得が期待される選手としてピークパフォーマンスが最大期を迎えることを逆算し、8~12歳の年齢層を対象に早期育成計画を打ち出すこととなった。具体的な競技種目はスピードスケート、ショートトラック、フリースタイル、スノーボードそしてボブスレーの競技種目がターゲットとなった。この理由は、他の競技ではオリンピック競技者を育てるために8年から12年の月日を要することから新しい競技者をリクルートすることができないと判断したためである。

4. ターゲット種目と強化費の配分

メダル獲得に向けて各競技団体における強化費の配分は、戦略的且つ効果的に実施されることが求められる。このことは、我が国(日本)の日本オリンピック委員会が策定した強化方策²⁾でも同様に触れられており、メダル獲得の可能性を分析し、強化費の重点配分を実施している。

Allingerら³⁾は、カナダにおける強化費の配分について検討するために次の条件に分類し、Tier I~IIIのグルーピングを行った。まず第1の条件として国内において国民の人気がある競技種目であること。具体的には、競技団体(NF)登録者数が10,000人を超えていることを基準として挙げた。次に過去3大会(1994 Lillehammer, 1998 Nagano, 2002 SaltLake)でメダルを獲得している競技であること(図2)。さらに2010年に向けてメダル獲得の可能性がある競技であることや、それ以降も、競技力を維持できることの項目を設定した。そして、これらのうち3つ全ての基準を満たしている競技種目(Tier I)、1~2つの基準を満たしている競技種目(Tier II)、全ての基準を満たしていない競技種目(Tier III)に分類した。これによるとTier Iには屋内のスケート会場を中心とするフラットアイススポーツ群が該当した。Tier IIは屋外のゲレンデとなる自然環境を利用したスノースポーツ群であり、Tier IIIはシューティング、滑走、ジャンプなど特別な施設が必要となるスポーツという特徴に分類され強化費配分の優先順位が決定された(表1)。

フラットアイススポーツが優先的に上位を果たす背景には、国民が気軽に参加できるスポーツ種目として登録人口の確保に反映され、構成

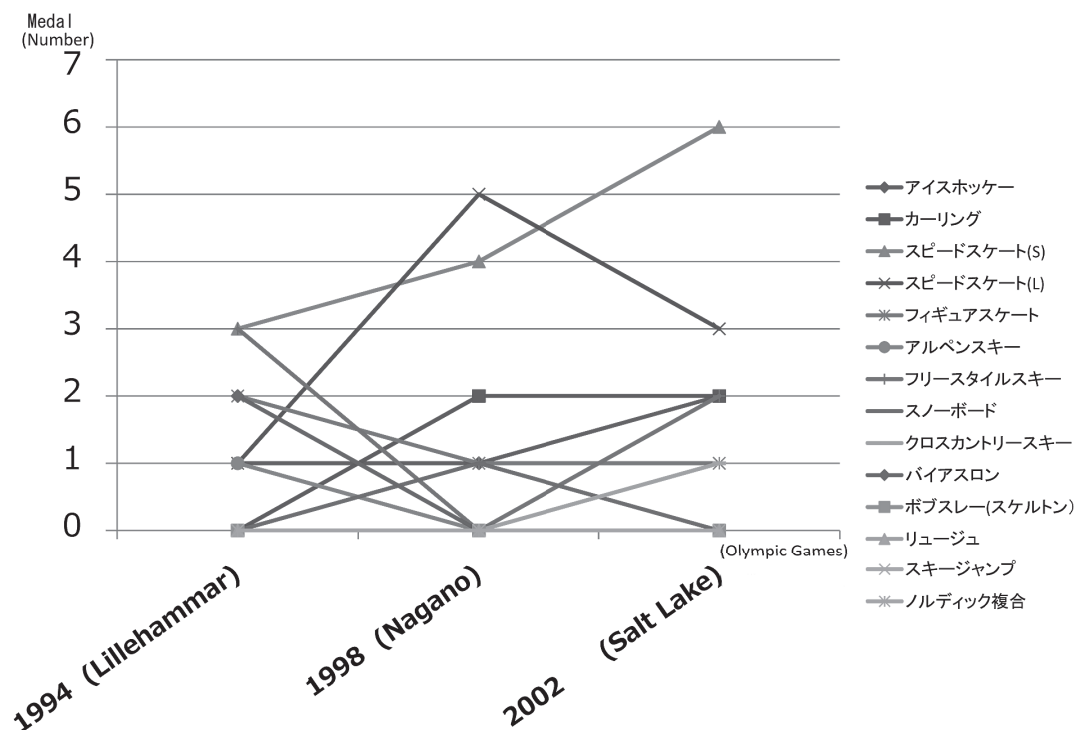


図2 オリンピックにおけるNFのメダル獲得推移

される登録者の層の厚さが潜在的なタレントをもった競技者の発掘につながる可能性を見いだすことができるのではないかと推測される。

これについて、登録人口とメダル獲得数の比較からGroup (G) 1～3のカテゴリーに分類した場合、登録人口が少ない競技団体群 (G3) ほどメダル獲得の機会が少なく、反対に登録人口が多い競技団体群 (G1) からはメダリストが多く排出されていることが示唆された (図3)。

強化費は毎年1,650万カナダドルの基金を冬季オリンピック種目に配分されてきたが、2010年のメダル35個の目標を達成するためには毎年1,010万カナダドルの増額が必要であるとしている。加えて新しい競技者の発掘やスポーツ医・科学に対する研究、そして選手の強化育成

費に毎年3,760万カナダドルに対して2,110万カナダドルを増額した (表2)。

一方、競技団体は世界ランキング上位選手をベンチマークし、選手の育成モデルを作成し、新たなアスリートの発掘戦略を実施する。また強化チームを結成し、各競技団体には専門コーチとコーチングシステムを構築するなどの責任が課せられた。双方の自助努力により、予算の有効活用が図られることが期待される。

5. ハイ・パフォーマンスサービス

過去の大会においてカナダのアスリートは、トップグループを構成する諸外国と比較して用具開発や情報分野において劣っており、スタートラインの段階で大きく引き離されていたと評

表1 協議団体への強化費配分のための基準

Tier	競技	Canadian Sport Culture	Olympic Success since 1994	Medal Potential 2010
1 Must Win	アイスホッケー	○	○	○
	カーリング	○	○	○
	スピードスケート	○	○	○
	ショートトラック	○	○	○
	フィギュアスケート	○	○	○
2 High Priority	アルパイン	○		○
	フリースタイル		○	○
	スノーボード	○		
	クロスカントリー	○		
3 Targeted Athletes	バイアスロン			
	ボブスレー			
	スケルトン			
	リュージュ			
	スキージャンプ			
	ノルディック			

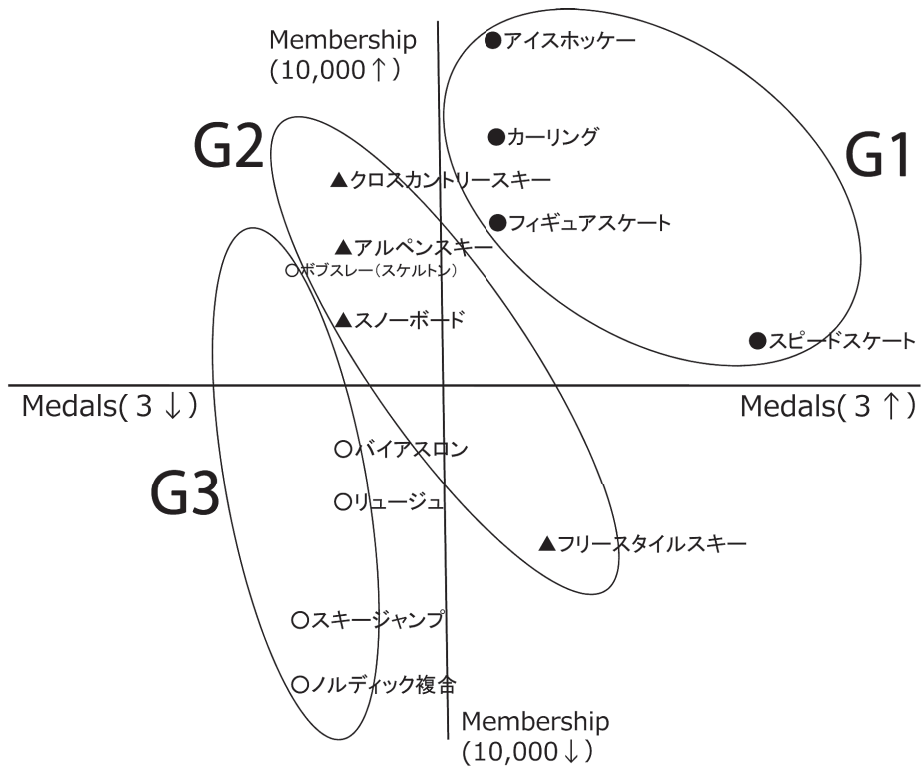


図3 NFの登録数とメダリストの分布

表2 Own the Podium 2010に向けた予算

	Existing Cost	Added Cost	Total
National Sports Organization	13,500,000	+ 10,100,000	→ 23,600,000
AAP	3,000,000	—	3,000,000
Top Secret2010			
Human Performance	—	+ 5,000,000	→ 5,000,000
Technology	—	+ 5,000,000	→ 5,000,000
Recruitment	—	+ 1,000,000	→ 1,000,000
Total	16,500,000	21,100,000	37,600,000

(CA\$)

働かれたことから始まった。この問題を解決するために、「Top Secret2010」プロジェクトが考案され、カナダのアスリートに対して用具、技術、情報、トレーニングに関する斬新的な研究を提供するプログラムである。これは、33のプロジェクトが構成され、9名のハイ・パフォーマンスアドバイザーが35種目（夏競技種目、冬競技種目、パラリンピック種目）のマルチサポートを実施している。この「Top Secret2010」プログラム（表3）は、最高レベルの MATERIAL 開発や事前の準備を充実させることによって、成功の確率を高める効果をねらいとしている。これによって競技者自信のパフォーマンスを活性化させ、サポート体制や事前準備を推進し、メダル獲得の目標を達成するために必要となる要素として考えられている。このようにトレーニング、試合、スポーツ医・科学などの分野によるサポートや、テクノロ

ジーの研究開発によるサポートなどが、高いレベルのパフォーマンスを発揮するための必要性を視野に入れている。

6. ホームアドバンテージ

2010年冬季オリンピックのホスト国であるカナダは、オリンピックの自国開催をホームアドバンテージとして、様々な資源を有効活用することがメダル獲得の成果をあげ、目標を達成させるための大きなチャンスになると考えている。

過去のオリンピックにおいては、ホームアドバンテージによって選手が100%のパフォーマンスを発揮するための恩恵を受けた前例が多くあり、メダル量産のチャンスが得られる大会になることが予想される。

一方、ホスト国以外の選手にとっては、複数のディスアドバンテージを被ることが予想され

表3 Top Secret 2010サポート項目

	サポート項目	関係分野	具体的なサポート
Category1	1)トレーニング	生理学	高所トレーニング、ストレンクス、スピード、持久力、メソッド、リカバリー
	2)試合	心理学	試合に備えた心理学研究
	3)スポーツ医・科学	バイオメカニクス	動作分析研究、新しい用具の効果
		栄養	減量、サプリメント
Category2	1)テクノロジー研究	摩擦抵抗	氷とのバランス、雪とスキー、空気抵抗とスーツやスレッド
		情報分析	スピードトラック、道具のデータ、コンディショニング評価
		マテリアル	ブーツなど道具の開発やデザイン、雪質にあわせたワックス

る。例えば、移動時に起こる時差の影響を考慮するならば、出場する大会スケジュールから逆算して数週間前に現地に移動することが通例である。このときには、長時間のフライトの移動による疲労やサーカディアンリズムなどの諸問題が発生するが、開催国はこの問題に対するコンディショニングの必要性がない。また、異文化の食生活習慣やオリンピック特有のセキュリティ問題、さらに冬季競技の特徴として挙げられる器材の運搬に対するコスト加算の問題、そして試合会場の環境適応など様々な諸問題が生じることになる。

また、その他にメリットとして考えられることは、国民に対するスポーツの啓蒙、文化的意義、国内経済効果、そして国威発揚による他分野に与える影響は多大知れない。このようにホームアドバンテージを活用することは、アスリートにとってメダル獲得の機会を得るために絶好の機会といえる。

7. まとめ

バンクーバー・オリンピックを開催するカナダのメダル獲得について計画されたOTPは、国の強化体制と目標を明確にし、これを推進するために組織体制、数値目標、強化費、ハイパフォーマンスサービス、そしてホームアドバンテージの観点で詳細な戦略プランが計画されていた。これらは、カナダにおける国際競技力向上の取り組みを知るうえで、我が国にとっても重要な情報として注視する価値があると考えられる。

特に、計画推進にあたり、メダル獲得に向けた準備から実行プロセスに関するロードマップ(表4)が描かれているが、これについてアメリカ・オリンピック委員会(USOC)は、カナダにおける世界クラスのアスリートが2010年のバンクーバー・オリンピックに備えるために大会出場よりも、むしろトレーニングに時間を費やし、最初の2年間はアスリートの発掘に労力を注いだ。後半の計画は技術向上、トレーニング開発、質の高いコーチ、パフォーマンス・

表4 OTP 2010に向けたロードマップ

	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
リクルート ・スピードスケート ・スノーボード ・ボブスレー	●----->	●----->	●----->	●----->	●----->		
情報収集	●----->						
戦略プランスタート	●----->						
データ収集		●----->					
全競技のホーム アドバンテージ計画	●----->				●----->		
Top Secret の開始						●----->	

ディレクターの雇用に力が注がれていると分析している。

このように、他国からもOTPがベンチマークの対象として注目されていることから、今後我が国においても国際競技力向上の施策を情報戦略の観点から、カナダのOTP実行計画に対するより精度の高い分析を推進させ、そのためにトリノ・オリンピックによる成果と今回のバンクーバー・オリンピックによる、選手選考基準、強化費の配分、新しいアスリートの発掘、テクノロジーそして人材育成やその登用などについて情報収集し、分析していく必要がある。

参考文献

- 1) 日本オリンピック委員会；JOCゴールドプラン専門委員会スポーツ立国検討プロジェクトレポート 2008, 2008
- 2) 和久貴洋, 阿部篤志, バイネルト・トビアス；国内外の国際競技力向上への取り組みからみた北京オリンピックと日本, 体育の科学, 第58巻第6号, 429-437, 2008
- 3) Cathy Priestner Allinger, Todd Allinger;Own the Podium2010 Final Report, 2004
- 4) Canadian Olympic Committee, 2004 Annual Report, 2004